昭和55年12月3日第三種郵便物承認
平成30年9月1日発行(毎月1回1日発行)通巻466号　ISSN 2187-7831

SMBC マネジメント プラス

SMBC経営懇話会
三井住友銀行グループ
SMBCコンサルティング

9
2018

特集

リカレントで専門人材を育てる

諏訪康雄 法政大学名誉教授
パナソニック 株式会社
DMG森精機 株式会社
学校法人 日本女子大学

人を育てる

菊池省三 教育実践研究家

挑戦する企業

株式会社 神明

講演会サマリー

白石 隆 熊本県立大学 理事長

京和傘（京都府京都市）

デザイン照明に和傘の技術 グローバル・ニッチ戦略が成功

繊細な竹の骨組み、手すき和紙のあたたかな風合い。独特の美しさがある和傘は、奈良時代に中国から原形が伝わり、祭祀の道具などに使われ、江戸中期になって開閉できる雨具となって定着したという。しかし、1950年代から洋傘の普及とともに使われなくなり、今では茶席や伝統芸能の舞台など、限られた場所でしか見かけないものになった。

京都にはかつて200軒もの和傘店があり、「京和傘」は全国区のブランドだった。しかし現在は、江戸後期から160年続く、株式会社日吉屋1店を残すのみ。全国的に見ても、和傘の製造元は10店ほどしか残っていないという。

日吉屋の代表取締役である西堀耕太郎氏は和歌山県新宮市生まれで、公務員として働いていた。1997年に、妻の実家である日吉屋で和傘に出合い、美しさに魅せられた。日吉屋が廃業寸前と知り、「この技術がなくなってしまうのはもったいない」と一念発起。インターネット販売の仕組みを整えるなど日吉屋の仕事に関わった後、2003年に5代目当主となり、会社を継いだ。

和傘の技術をほかのものに転用できないかと考えたとき、和紙を通したやわらかい光を見て思いついたのが「照明」だった。「最初は和傘の下に電球を付けただけのものを、インテリア関係の展示会に出展した。しかし『使うシーンが思い浮かばない』と言われ、受注につながらなかった。作り手の思いだけが先行した失敗作だった」と西堀社長は振り返る。

そこで発想を変えて照明デザイナーの力を借り、まず照明器具として魅力あるデザインを出発点に製品開発に取り組んだ。消費者ニーズに応えるマーケットインの考え方を取り入れ、生み出したのが2006年に発売した「古都里（KOTORI）」だ。竹の骨組みや開閉できる点が「和」を感じさせるこの製品は、2007年にグッドデザイン賞（特別賞・中小企業庁長官賞）を受賞。手作りのため価格が高く、日本市場だけで販売数を伸ばすのは難しいと考え、販路を海外へ拡大。グローバル・ニッチ戦略が功を奏し、15カ国で販売されるヒット商品に成長した。

また西堀社長は「伝統の技を世界で売る」ノウハウの横展開を目指して2012年に株式会社TCI研究所を設立。これまでに300以上の伝統工芸の製品開発・海外進出プロジェクトを支援してきた。

たとえば、表面にうっすらと花が咲いたような模様が浮かぶ「花結晶」という清水焼の技術がある。海外市場のニーズに合わせ、コーヒーカップやインテリアタイルとして製品化したところ、大ヒット。こうした成功事例が次々と生まれている。

伝統を昔と同じ形で守るのではなく、その技術を使って時代に合った新製品を生み出すことが重要と感じた西堀社長は、日吉屋を〝老舗ベンチャー〟に生まれ変わらせようと、「伝統は革新の連続」という企業理念を定めた。海外のデザイナーやバイヤーの意見を取り入れた製品づくりを続け、和傘の構造をベースに、竹や和紙の代わりにスチールや樹脂素材を使った照明も開発している。

「世界に誇れる伝統工芸が日本にはまだまだある。魅力的な製品を生み出し、ブランドとして世界に広く発信していきたい」（西堀社長）。新しい姿となって世の中に現れる伝統の技に注目したい。 MP

1竹の骨に手作業で丁寧に和紙を貼っていく製造工程。160年続いた伝統の技だ。2専用の道具で一筋一筋、和紙を骨に接着していく。和傘市場の衰退で道具の作り手もいなくなり、現在は道具も自社内で作っている。3株式会社日吉屋代表取締役社長の西堀耕太郎氏。老舗の技を活用し、新しい市場の開拓に成功した

4和傘の素材・仕組みを用いて開発した「古都里」は、世界の高級ホテルや和食店などで使われている。5和傘の技術を応用した照明器具「Moto」。スチールや樹脂など、和傘の範疇を越えた素材を採用したもの。6株式会社TCI研究所がフランス企業2社と共同経営でフランス・パリにオープンしたセレクトショップ「アトリエ・ブランマント」。日本の匠の技を発信する場として、陶磁器や繊維・皮革製品など幅広い製品を展示している。7ファッション分野への進出も試みている。デザイナーの桂由美氏が和傘の技術を使ったウエディングドレスをパリコレクションに出品した（©YUMI KATSURA INTERNATIONAL CO.,LTD.）

取材・文／田北みずほ　写真／水野浩志